

作家としての〈立場〉をつくるということ：『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』を読む

石川, 巧
立教大学教授

<https://doi.org/10.15017/15099>

出版情報：九大日文. 12, pp.29-45, 2008-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

作家としての〈立場〉をつくる るといふこと

——『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』を読む——

ISHIKAWA
TAKUO
石川 巧

1 作家としての〈立場〉をつくる

モダニズム作家・龍膽寺雄は『人生遊戯派』（昭54・12、昭和書院）という回想記にこんなことを記している。——昭和四年の夏、伊香保温泉の宿で川端康成と出逢った龍膽寺は、「虚名の華やかさ」に背を向けて「誰が書いたかわからない作品として、世に行われる」ような小説を書きたいと語る。だが川端は、そんな文学青年の夢想を一蹴し、「それはだめだ。出来ることじゃない。それよりも、大事なことは、作家としての立場をつくることだ。いい作品を書く、書かないじゃない。まず作家の立場をつくることだネ。そうでなかったら、作品を発表しようがない」と答えたという。

第六次「新思潮」から出発し、「文芸春秋」編集同人となつた川端は、大正十三年、二十五歳のとき「文芸時代」を創刊し、文壇に権勢を振るっていた菊池寛に認められて三十六歳で芥川賞の銓衡委員になった。小説家であると同時に気鋭の批評家と

しても注目され、大正十一年から昭和九年まで各誌紙に書き続けた文芸時評は「『文壇の勘』を醸す筆頭の時評」（進藤純孝）と評価されている。文芸復興が叫ばれた昭和八年には「文学界」創刊に加わり、翌年には内務省や文部省につながる文芸懇話会の会員になっている。日本文学振興会の理事に就任したのは三十九歳のときである。

その一方で、川端は関東大震災という時代の逆境を新たな創作のバネとしてぐぐり抜け、太平洋戦争の末期には何も書かないというスタンスをとることで戦後のGHQ／SCAPによるバッシングを回避した。作家グループや出版界に豊富なコネクションを作り、映画、美術、演劇などの新興芸術運動が醸し出す時代の空気を深く吸いながら、横光利一とともに新感覚派を名乗った時代は、その鋭い識別能力によつてつねに文壇に影響力をもち、自由にも書くための〈立場〉を確保し続けた。戦後も、旺盛な創作活動のかたわらで数多くの新しい才能を発掘し、日本ペンクラブや近代文学館設立のために活躍。やがてノベル賞へとつながる国際的評価の高まりを得ていく。

それぞれの時代感覚を鋭敏に掴まえる作家的資質は、個々の作品の表現や文体にも遺憾なく発揮されている。約半世紀にもおよぶ文筆生活を通じて、一方では前衛的かつ実験的なモチーフ・文体を駆使し、一方では通俗的な連載小説、少年少女小説にも清新な切り口をみせた川端がめざしていたものは、明治二十年代以降の近代文学が支えとしてきた静止的なりアリズム観を相対化し、時間や時間性の経験を動的に表象していくような

文学の創出だった。たとえば、綿密なプロットの構成と多様な語り的手法によって読者を物語の世界に誘っていく谷崎潤一郎の文学を対極に置けば、川端のそれは、「はじめり」と「おわり」に収束されることのない経験の秩序が、リズムと速度をもなつて読者との距離を縮めていく同時性を生命線としていた。そこには、対象を眺め、再現する手段として「書く」のではなく、「書くこと」それ自体が現実をつくりだす行為であり関与なのだという認識がある。彼がしばしば用いる現代文学という名称も、近代文学における「描写」という言葉に付着する事後的な響きを排除しようとする認識に根を張っている。その意味で、川端は存在そのものが戦前戦後の文学状況におけるひとつの権威だった。文学という城壁の内側では、生き生きとした現実を言葉の力で結晶化させることを夢想し、対外的には圧倒的な影響力を行使して現代文学の展開に方向性を与える表現の工作者だった。

『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』（平9・12、新潮社、初出「新潮」平9・10）は、こうした川端の作家的資質と、彼が文壇において揺るぎない「立場」を維持し続けることができた要因を考えるうえで極めて興味深いテキストである。三島由紀夫こそは、文壇における川端の「立場」を正しく見抜き、それを利用して自己の評価を高めていった作家であり、長年にわたる往復書簡からは、師弟として振舞うことを黙約した二人が言葉によつてそれを強固なものに仕立てていく過程と、お互いの生き方や思想が決定的な齟齬をきたして緊張関係が瓦解していく様

子がありありと窺えるからである。ここでは、主に川端康成の側から往復書簡を読み解くことで、「作家としての立場をつくる」とはどういうことなのか、あるいは、そこには文学に対するどのような認識が潜んでいるのかを省察したい。

2 〈師〉／〈弟〉としての川端康成／三島由紀夫

二人の往復書簡は、野田宇太郎と島木健作を介して謹呈された三島の第一小説集『花ざかりの森』（昭19・9、七文書院）に対する川端の礼状からはじまる。日付は昭和二十年三月八日。すでに日本各地が空襲にさらされ、同六日には全国の新聞紙の夕刊が廃止となる時代である。

川端はその短い礼状に、北鎌倉の某家で「宗達、光琳、乾山、また高野切石山切、それから天平推古にまでさかのぼり、あるのが嘘のやうな物沢山見せてもらつて、近頃の空模様すつかり忘れしました。紅梅も咲いて居りました」と記す。三島もまた「都もやがて修羅の衢、返返る寒さに都の梅は咲くかと思へばしほみながら、春の魁らしい新鮮さを失つてゆきます。当分の閑暇をたよりに、頼政と菖蒲前の艶話を書いてみたいと思つてをりますが、如何なりますか」（3・16付）と応答する。それぞれの書簡の間には、死者十万人といわれる東京大空襲（3・10付）があり、玉砕を覚悟した本土決戦の噂さえ囁かれていたわけだが、二人は「都」が「修羅の衢」と化しつづつあることを承知しつつも、足利義尚や源頼政の時代に思いを馳せ、「梅」が醸した

す風情に身を委ねる素振りを共有するのである。数年後には日本ペンクラブ第四代会長に選出(昭23・6〜40・10)される四十五歳の川端と東京帝国大学法学部に入學して間もない二十歳の三島は、こうして世代の垣根を越えて戦争という現実からの距離感を確かめ合う。

川端に受け容れられるきつかけを掴んだ三島は、戦争末期の勤労動員先からも長い書簡(昭20・7・18付)をしたためる。

——その冒頭部には、「大学相手の寮内の図書室掛りで、物を書く暇にも存分に恵まれ、感謝しつゝその日を送つてをります。その傍ら寮内の回覧雑誌の編輯に従事したりして、仕事は好きな仕事ばかりで、今の生活を幸福なものに思つてをります」とあり、当時の三島が戦争末期とは思えないほど穏やかで弛緩した「生活」を送る自画像を描こうとしていることがわかる。だが、書簡の中盤から自分のなかに沸き起る文学への熱情を語りはじめた三島は、

——このやうな時に死物狂ひに仕事をするのが、果して文学の神意に叶ふものか、それはわかりません。たゞ何かに叶つてゐる、といふ必死の意識があるばかりです。正直このやうな死物狂ひの仕事からは偉大な国民文学の萌芽など、生れる筈はございません。(中略)文学の本当の意味の新らしさといふことも考へる折が多いのですが、それはたゞ端的に時代意識が灼きついてゐるといふ意味だけでなく、現在といふものめくるめくるやうな無意味な瞬間を、

痴呆に似たのどけきで歌つたものといふ意味も持つてしかるべきでせう。

と記し、自分がめざしているのは「偉大な国民文学」であると宣言する。ここで注目したいのは、三島が「死物狂ひの仕事」ではなく「現在といふものめくるめくるやうな無意味な瞬間を、痴呆に似たのどけきで歌つたもの」にこそ新しい文学の可能性があると説いている点である。そこには、のちの『仮面の告白』(昭24・7、河出書房)につながる問題がすでに内在している。徴兵入隊検査(昭20・2)を受けながら医師の誤診「風邪による高熱が結核と判断された。ただし、虚弱な体躯だった三島を見た医師が意図的に誤診したのではないかと推察されている」で即日帰京を命じられるという汚名と恍惚を体験し、死と隣り合わせの戦場から限りなく遠ざけられていた三島にとつて、自己を「痴呆」になぞらえることはひとつの必然だったのである。引用に続く文面で三島は、「絶滅といふ生活でないものを生活した報^{ムカ}ゐが、彼等を次第に畸形にします。彼等は人の手を借りずして滅びるでせう。文学にも亦、生活し、体験しては行けない限界、文学的体験(リルケの考へたやうな)の範疇から逸脱したものゝ存在が認められるのではないでせうか。文学的な宿命観を、文学の埒外ではねばならぬやうな悲痛な二者選択が要求される刹那が来るのではないでせうか」と記し、「楯の会」結成から陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地・総監室での割腹自殺へと突き進んでいく彼の後半生を予言するやうな言葉を残す。かつて、『三島由紀夫―ある評

伝―」（野口武彦訳、昭51・6、新潮社）を書いたジョン・ネイスンは『仮面の告白』について、「三島の仮説的な仮面から語り出されるこの告白は、過去の決算であるよりもむしろ未来への予言であった」と述べているが、まだ逢ったこともない川端に宛てて出されたこの書簡には、三島が成し遂げようとしたことの輪郭がはっきりと兆しているのである。

そんな川端と三島が初めて対面するのは、昭和二十一年一月二十七日のこと。それ以前に佐藤春夫に逢うなどして自分を引き立ててくれる文学上の（師）を物色していた三島は、思い切つて鎌倉の川端家を訪ねる。当時の川端は、戦争末期に久米正雄らとともに発足させた貸本屋・鎌倉文庫を文芸出版社として再出発させ、雑誌「人間」を発刊しながら、文部省の国語教科書審議会にも加わつて新しい教科書を作成するといつた多忙な日々だった。三島はこのときの印象をまとめた未発表メモ「川端康成印象記」（フートの切れ端に書かれたもの。三島由紀夫文学館所蔵、『決定版 三島由紀夫全集26』平15・1、新潮社）で、他の来客があつたにもかかわらず居座り続けた自分に対して川端が「下手な皮肉」をいっただけに触れ、「この不手際が氏の本質ではないのか」という意味深長な一言を記している。また、このメモの末尾には、こんな一節もある。

川端氏のあのギョツとしたやうな表情は何なのか、殺人犯人の目を氏はもつてゐるのではないか。僕が「羽仁五郎は雄略帝の残虐を引用して天皇を弾劾してゐるが、暴虐を

した君主の後裔でなくて何で喜んで天皇を戴くものか」と反語的な物言いをしたらびつくりしたやうな困つたやうな迷惑さうな顔をした。／「近頃百貨店の本屋にもよく学生が来てゐますよ」と云はれるから、／「でも碌な本はありますまい」と云つたら、／「エエッ」とびつくりして顔色を変へられた。そんなに僕の物言ひが怖ろしいのだらうか。

この遣り取りには、書簡における過剰なおもねりとは違う高邁さ、すなわち、「殺人犯人の目」をもつた川端を言葉で振じ伏せ、驚かせてやつたことを誇るやうな陶醉感が漂っている。書簡には絶対に見ることのできないひとつの直観が潜んでいる。二人の師弟関係は、この後、四半世紀にわたつて継続されるわけだが、回顧的な視線でこの原稿を読むと、三島が川端に対して抱いていた認識は、初対面で得られた直観が少しも揺らがなかつたのではないかという思いにさえかられる。

だが、その一方で、三島が川端のなかにしたたかな「真率」さを感じとり、最上の演技をして見せるのにふさわしい相手と認めたことも確かであろう。知遇をえた直後の書簡（昭21・3・3付）において、三島はあられもない興奮とオマージュを書き連ね、川端という巨星から微かな光を分け与えてもらおう自分という役割を承認してもらおうとする。たとえば、冒頭近くではヘルダーリンがシラーに宛てた書簡から「わたしがあなたの傍にゐる間は、わたしの心は全く小さくなつてゐました。さてあなたの傍を離れてみますと、わたしは自分の心の乱れをどうす

ることも出来なくなりまして」という言葉を引用し、卑屈とも思える態度で足下にかしずこうとする。また、高揚した面持ちで自らの文学論を書き連ねる場面では、従来のリアリズムに対抗するためには「内面的衝動を一瞬一瞬の形態に凝結せしめて、時間と空間の制約の外で、人工的に再構成」するような「ロマンチック・メカニズム」の文学が標榜されてしかるべきであると記し、西欧の前衛芸術や文芸理論から多大な感化を受けていた時代の川端が、新感覚派から新心理主義へと展開していく作家活動のなかで提唱した小説技法を復誦するようなもの云いをしていいる。書簡の最後を締めくくる「貴下は一息で私の焰を吹き消しておしまひになるでせう」という一節がすべてを物語るように、若き無名作家に過ぎなかつた三島は、服従することと引き換えの庇護を求めたのである。

その後、一方的に差し出されるいくつかの書簡には、「抒情歌」を拝読してゐてふしぎな暗号を感じました。けふお目にかけました「中世」も（抒情歌に比べれば主題は単なる神憑りの低い醜いものでございますが）心霊についての物語でございまして、「抒情歌」ははじめて日本の自然の美と愛を契機として、白昼の幻想、いひかへれば真の「東洋のギリシヤ」を打建て、目覚めさせてくれたやうに思はれます。「貴下（かういふ粗雑な二人称をお恕下さい）を、堀辰雄氏より遥かに高いところに我々が仰いでをります所以のものは、肉体と感覚と精神と本能と、すべて靈的なもの肉体的なものとが、青空とそこを染める雲のやうに、微妙な默契をみせてゐるからです」、「雪国」については、

（この作品何度拝読いたしましたことか！）あまりに大きく高く、小さい私には牧童がいつかあの山へも登れるかと夢想する彼方の青いアルプスの高峯のやうに仰がれるのみでございませう」（昭21・4・15付）、「抒情歌」や「むすめごころ」のやうな作者の指紋も残さないふくよかな作品に形をかへてゐる、——作家としての幸福これにまさるものがございませうか。同時に、その「場面」が完成すると同時に、永久にその場面へ招待される由もない作家の「生活」はどんなに寂しいものでございませうか。その孤独の寂しさを卑怯に避ける多くの作家たちは、作品の「場面」へいつまでも招待されたがつて、小さな椅子でも自分のための一隅を確保しておかうといふ哀れな試みを捨てません。私も亦さういふ妄想の擒の一人ではないかと怖ろしく思はれました」（同6・5付）、「戦争中に比べますと、東京の人たちの表情は美しくなりました。どこか透きとほるやうになり、衰へ、影が淡くなりました。人々の運命が、どうやら近代へよりは、古代へ押しやられてゆく如く思はれます。／＼このごろしきりに思ひ起される一行は、「人間」にお書きになつた武田氏「武田麟太郎——筆者注」追悼の御一文のものでございます。／＼その人の死に愕き哀しむよりも、その人の生に愕き哀しむべきであつた二（同6・15付）といつた文面が並び、三島は川端文学の最も善き崇拜者という（立場）を獲得することに努める。そこには、逆説的でありながら極めて率直な私たちで、自分に創作のための「小さな椅子」を与えてくれることを懇願する三島がいる。

昭和二十二年十二月、高等文官試験行政科に合格し大蔵省に入省したばかりの三島は、その翌年の九月にキャリア官僚としての将来を棄てて大蔵省を辞職し、作家として生きていくことを決意する。前年に川端の推挙で雑誌「人間」（昭21・6）に「煙草」を発表し、文壇への本格的なデビューを果たしていた三島は、川端という権威に認めてもらい、自分もまた文壇の片隅に「小さな椅子」を与えてもらったと確信して職業作家へと踏み出し、さらには、「川端氏の『抒情歌』について」（民生新聞）同4・29、浪漫新書『夜のさいころ』（昭24・1、株式会社トッパン）「解説」を書くなどして、川端から「作者の思ハぬ事いろいろ見てゐて下さいまして殊の外難有いものでした」（昭23・10・30付）という返信をもらうほどになる。弟・千之はその頃の三島の有頂天ぶりを、「神様の手が、もちろんそれは川端さんの手だったのですが、突然天から伸びてきて兄を手のひらにのせたようだった」（兄・三島由紀夫のこと、「小説新潮スペシャル」昭56・1）と表現したが、それは必ずしも大袈裟な形容とはいえない。だが、職業作家として生きることを決意した三島は、ここで世間をアツといわせるための戦略的な作品を構想する。彼は「仮面の告白」という題名まで明らかにしたうえで、その作品について次のように記している。

——「仮面の告白」といふ仮題で、はじめての自伝小説を書きたく、ポオドレエルの「死刑囚にして死刑執行人」といふ二重の決心で、自己解剖をいたしまして、自分が信じ

たと信じ、又読者の目にも私が信じてゐるとみえた美神を絞殺して、なほその上に美神がよみがへるかどうかを試めたいと存じます（昭23・11・2付）。

ここには、三島が深い内省のすえに辿り着いた文学的な方法意識が鮮やかに示されている。それまでの妙におもねった姿勢が消えて、自分のめざすものを堂々と宣言しているようにもみえる。だが、この時期、日本ペンクラブの活動に忙しかつた川端は、構想段階ではもちろんのこと、『仮面の告白』が刊行されて批評家や読者から高い評価を得た後にも作品の内容にまつたく言及しない。それどころか、エジンバラでの国際ペンクラブ大会への自費参加を促す書簡で「百万円くらゐハお出来になるでせう」（昭25・3・15付）と暢気なことを云ってみたり、ペンクラブによる広島・長崎への原爆被災地訪問に物見遊山で同行しませんかと誘ってみたりして三島に書斎から飛び出すことはかり奨めている。これは随分あとになってからのことであるが、川端が三島に送った書簡には「あなたも少くともペンの会員であるといふことだけでも継続しておいていただけると幸ひです」（昭31・10・23付）といった教唆的な表現もみえ、この時期の川端がいかに三島をペンクラブの活動に引き込もうとしていたかが窺えるが、それはある意味で、自身の方法意識をとことん突きつめるために書斎に閉じこもることを必要とした三島と、対外的な活動に奔走し華やかな舞台上に駆りだされることが多くなつていく川端が、お互いの接点を見いだしにくくなつていく

状況でもあったといえるだろう。

『仮面の告白』の黙殺という観点で書簡を見ていくと、もうひとつ興味深い文面に出くわす。昭和二十六年八月、箱根の強羅に滞在していた川端は、再び「西洋へ行かれればまた新しい世界がひらけると思ひます」といった具合に飄々とヨーロッパ行きを奨めたあと、突然、次のように記す。

あなたの仮面の告白を訳して居るアメリカ人は何といふ人をして居るのでせうか。実はステグナア（この春来朝の短篇作家）の関係でアメリカの大学の文学雑誌に、日本の短篇も毎号でも出してハとのこと、再三、また二三の人に手紙で言つて来てくれて居ますので、作品を送るについて、日本文学を読む在日の外人にも参考意見を聞いてみたいと思ふのです。あなたも西洋に訳して面白いと思はれる作品、お気づきのものがあれば、一篇でも推薦していた、だけると幸せです。ステグナアには、一度、ただけでなく、続けていろいろ送るつもりです。小松清君の話では、サルトルの雑誌を出して居る社でも、日本文学の集を出版してみたいと言つて来て居るさうです。かういふ話は前にもありましたが、ペンクラブが怠けがちでした。しかし応じた方がよいと考へるばかりでなく、実行に移すやうつとめるつもりです。

(8 ・ 10 付)

3 川端文学の〈翻訳〉とノーベル賞への接点

ここで川端が執心している日本文学の翻訳問題は、ひとつの伏線となつてのちのちの二人の關係に影響を与える^①。たとえば、昭和三十一年十月二十三日付で川端が出した書簡には、

拜啓、今日 Knopf 社の Straus 氏から航空便で Snow Country が一部とどきました。\$ 1.25 といふ廉価本（高このに驚きますが）で、表紙の芸者の絵にはおどろきました。また、裏表紙の私の履歴に remarkable young writers as Yukio Mishima を has discovered and sponsored とあるのにも驚きました。あなたにすまない気がします。body-building や重量あげに devoting してゐないせゐですか。いづれは私の名は文学史上にあなたを discover したといふ光榮なまぢがひだけで残るのかもしれない。（中略）キインさんから手紙が来て、潮騒ハバストセラアになつたさうですね。斜陽はバストセラアになりさうな^{△△}好評とか。斜陽について Stockholm と Helsinki と Paris と Oslo の出版社から照会が来ました。アメリカの太宰訳をれんらくしてあげたところから、私が太宰版權の agent と思はれて居るらしいのです。私の千羽づるもドイツ訳を見てフランス訳が出るやうです。しかし、雪国や千羽づるのやうな小説が西洋二訳されたところで、どうでせうか。出版社と book レヴュウはもつともらしく解釈するのに苦心して居るやうです。

とある。この「remarkable young writers as Yukio Mishima
has discovered and sponsored」とあるのにも驚きました」とい
う一節は、文字通り川端の謙遜として解釈することもできる。
つまり、将来を嘱望される作家である三島由紀夫を見出したと
書かれることは「光栄」だが、本当のところは自分が見出した
わけではなく、あなたがあなた自身の才能をもってして文学史
上に名を残すような作家になったのだから、「discover した」
という表現は「まちがひ」だと、川端自身が本当に思っている
という解釈である。だが、この記述からは、それとまったく逆
のメッセージも看取することができる。それは、お互いの関係
性がどうであろうが、英語圏で流通しはじめた『Snow Country』
には Yasunari Kawabata こそ Yukio Mishima を discover した人
物だと書かれてしまっているのであり、後々の文学も同様の記
述が残る、……という関係性の規定を促しているという受け止
め方である。それまで〈師〉と〈弟〉の秩序を忠実に守り続け、
過剰な身振りで川端にかしずいてきた三島にとつて、冗談や謙
遜であろうと、川端からの私信に「discover した」と書かれた
ことの意味は大きい。川端がどのような思惑をもってこの文面
を記したかはわからないが、たとえそれが意識的な抑圧である
うと無邪気な戯れであろうと、受信者としての三島にとつては、
英語圏の出版社や読者たちのなかにその関係性が事実として刻
印されたという宣告に他ならなかっただろうし、将来にわたっ
てその刻印を修正することが困難であることは、彼自身が誰よ

りもよく分かつていたからである。実際、この書簡への返信で
三島は、なかばおどけた調子で、

「雪国」と「千羽鶴」の外国での御出版をお慶び申上げ
ます、アメリカ人もなか／＼バカではありませんから、わ
かるところはわかると思ひます、却つて歐洲の方が、頭
が硬化してゐて、日本文学に対して、柔軟な理解力を欠い
てゐるのではないでせうか。小生のところへ先日、この夏
東大セミナーで来日したとき会つた Mark Shore 氏から来
信あり、Hercourt Brace & Co. で、Donald・キーン訳で
「太陽の季節」を出すべく、石原君と契約交渉中で、キ
ーン氏はこの訳に大へん乗気だ、とありました、そして註釈
がついてゐて、「石原は、米国青年層には無害である。そ
れは既にみんななされてしまつたことであるから」とあり
ました。なほクノツプのストラウス氏は、来年三月ごろ来
朝する由です。小生の「潮騒」は一週間だけ New York Times
のベスト・セラー欄に出たさうですが、一週間で消えた由
です。小生は翻訳者ウエザビーが、あまり金のことでゴ
タ／＼云ふので、手を切りました。新しい翻訳者を、次
は見つけなければなりません。外国人といふ外国人が、み
んなウエザビーのやうな、お金ノイローゼでもあるまいと
思ひます。(昭31・11・1付)

と書き、「discover した」云々の話題にはまったく言及しな

としない。ヨーロッパの人々の頭がいかに硬化していて「柔軟な理解力を欠いてゐるか」、ドナルド・キーンが石原慎太郎の『太陽の季節』をどれだけ辛辣に批評したか、『潮騒』の翻訳者がどんなに金に汚い人間だったか、といった悪態をつくことで、ここでの三島は、むしろ、本質的な話題を回避しているようにさえみえる。

ここで興味深いのは、その後、川端から出された書簡の多くに英語圏の人々との積極的な交流と自作品の英訳に関する話題が多くなることである。この時期の川端は、それまでではないほど頻繁に三島への書簡をしたためるようになっており、「Mr. Murray、さんハアフガニスタンのハツダの仏頭によりかゝらせたりして写しました。／貧寒な顔の文化輸出など妙な事になつて来ました。あなた位の若さだとよかつたのにとまた思ひました」(昭32・2・7付)、「Encounter 社で今月三十一日歓迎パーティを催してくれるといふ電報でせめて御高作訳だけでも読んで居ります途中 上智のロオゲンドルフ神父と会食 御上演の話しましたところ自分も招いていただけないかお頼みしてくれとの事 Encounter 誌ハ借覧されました お差支へなければお願ひいたします」(昭32・3・21付)、「千羽鶴の書評沢山送つて来ました 日本文学珍らしくていたはるのでせうが大体思ひの外の好評 しかしこんなのが現代日本文学の見本と考へられる弊ハあり」(昭32・6・29付)、「例のほんやくのお話、文芸家協会とペンの委員会二御出になるのもよろしいですけども、考へると、アジア諸国から英訳短編をお取寄せになるといふ事務的

のことですから、ペンの松岡洋子さん(目下事ム室ハ朝日新聞の七階)に連絡なさるだけでもいいかもしれませぬ」(昭33・2・9付)といった具合に、外国人や海外メディアと自分との接点を事細かに書き連ねている。しかも、それは恐らく誰彼の見境なく書かれているのではなく、三島由紀夫という相手を焦点化したうえで、それなりの応答を期待しながら書かれているのである。

昭和二十六年十二月二十五日から翌年五月十日まで、朝日新聞社の特別通信員として世界一周の旅をして以来、各国に幅広い交友関係ができた三島は、昭和三十三年七月九日から翌年一月十日にも、自作の『近代能楽集』を英訳(ドナルド・キーン訳)したクノツプ社の招待で北米を回るといふ経験をしている。そのとき川端に宛てた書簡に、「ドナルド・キーン氏が三十一日こちらを発つて日本へ行きます。氏に行かれると心細いのですが、仕方がありません。氏とはほとんど連日会つてゐますが、実に親切によくしてくれます。パーティーの英語の会話に疲れて、氏とだけ、公然と、その席にゐる人の悪口を日本語で云つて大笑ひするのは痛快です。／ニューヨークで名を成すことはとても不可能だと思ひます。キーン氏によると、ニューヨークの人は、道ばたに白い河馬が寝てゐても愕かれないのださうです。さういふ、何事にも興味を持たない、乾燥した有名人に大分会ひました」(昭32・7・29付)とあるように、当時の三島は日本人作家のなかでも稀な社交性を發揮して海外の文学関係者との付き合いを深めていた。この前後、日本ペンクラブ会長として国際ペンクラブ執行委員会に出席し、九月に開催される国際ペン

クラブ東京大会の準備に追われていた川端にとつて、三島の国際的な人脈と情報はきわめて実質的な次元で必要とされていた。

昭和三十三年二月、国際ペンクラブ東京大会の成功と功績が評価され、川端は国際ペンクラブ副会長に選出される。翌三十四年の国際ペンクラブフランクフルト大会ではゲーテ・メダルを、同三十五年にはフランス政府から芸術文化オフィシエ賞を贈られる。だが、国際舞台での華やかな活躍とは裏腹に、川端の書簡には睡眠薬を常用することに伴う厭世的な文面も顔を見せるようになる。「なんとか仕事ぶりを改めたいと思ひます。厭^{マヤ}生的になるばかりですから。新潮のみづうみもやけくそですが、一向作品がやけくその表情も出ないので」(昭29・4・20付)という『みづうみ』(昭30・4、新潮社)執筆前後からはじまる徴候は、胆石での入院治療を挟んで「私今年は軽井沢へ眠り薬をやめる計画で参つたのですが八月中来客多過ぎる事などで成功いたしませんでした。今朝の新聞(産経)に出て居ます「恐怖の睡眠薬V (Valamin)」といふあれであらうと思ひます。つまり眠り薬が麻薬、覚醒剤の代役をつとめる事になつて来るのを私も恐れて居ります」(昭34・10・13付)といった状態に昂進していくのである。この時期に川端が書いた「眠り薬」(週刊朝日別冊「昭34・9・1」を読んだ三島はさすがに驚き、「まことに差出がましい申上げやうかもしれませんが、何卒ここらで、ひとつ根本的に御養生、御治療下されば、どんなによいことかと存じます」(昭34・10・5付)という見舞いの書簡を送る。

しかし、ここでも書簡の文面は文字通りの解釈とは別に、もうひとつの文脈を作り出しているように見える。それは、睡眠薬に関する話題の直後に三島と川端がそれぞれ書き記す内容が、明らかに陽と陰の対照を構成している点から窺うことができる。試みにそれに該当する部分を抜き出して並列してみよう。

妻も赤ん坊も元氣すぎるほど元氣に暮してをります故他事午御休心下さい。赤ん坊は小生の顔を見ると、やたらにニヤニヤ笑ふのでキミが悪いです。／奥様は近頃如何お暮しでいらつしやいますか、お伺ひ申上げます。(10・5付)

家内は沖中内科(日本)臨床第一号とかいふ病氣(?)の方がどうもはつきりしないでその軽い症状が時々出ます。私は来年五月まで二渡米、南米から口オマのオリンピッククなどと考へて居りますがどうなりますやら(10・13付)

そこには、家庭のなかに新しい生命を得てますます活力を増していく三島と、原因不明の病に悩まされる妻を抱えて先々の予定もおぼつかなくなっている川端の衰弱した様子が鮮明になっている。それまで十数年間にわたつてよき弟子として活躍し、常に川端を見上げるように言葉を書き連ねてきた三島は、この頃から同じ目線あるいは労わりの目線で川端を捉えるようになり、余裕のある態度で自分の精力的な仕事ぶりを語るようになるのである。

だが、この後、三島は政界のスキヤンダルを描いた『宴のあと』のモデル問題で、有田八郎元外務大臣からプライバシー侵害によって提訴されてしまう。文芸家協会の言論表現委員会や日本ペンクラブへの事情説明をすることになった三島は、川端に協力を求めてそれぞれの団体から支援をとりつける。三島にとって、それは公的に借りを作ってしまうことであり、明らかに失策を意味していた。

ものごとの機微を鋭く察知する川端は、この小さな借りに対して、はつきりとした恩返しを要求している。それは昭和三十六年五月二十七日付で出された次のような書簡に記されている。

——いつもく御煩はせするばかりで恐縮ですが例ののにおける賞の問題 電報を一本打つただけではいろいろの方面に無責任か（見込みはないにしても）と思はれますので極簡単に結構ですからすみせん文をお書きいただきませんか 他の必要資料を添へて英訳か仏訳かしてもらひあかでみいへ送つて貰ひます 右のあつかましいお願ひまで 私この三十日夜の鞍馬の正月の満月といふのを見て帰ります

一般的に、ノーベル賞に候補なるものは存在しないといわれている。だが、その一方で、個々の作家の作品や業績と同様に人種や地域のバランスなどが勘案されるともいわれる。また、ここで推薦文を依頼された三島自身、若い頃から翻訳による外

国人読者の獲得につとめ、自作を世界文学のひとつに組み込むことを夢みており、誰よりもノーベル賞を渴望していた作家である。たとえば、この推薦状から数年後の昭和四十年九月に『豊饒の海』の取材を兼ねて妻とともに世界一周の旅に出た三島は、特別の用件があるわけでもないのにノーベル賞授与式が行われるストックホルムの街を訪れている。ちょうどこの時期、日本では「朝日新聞」（夕刊9・25付）の報道がストックホルム発のAP電として三島が他の九十名ほどの作家とともにノーベル賞の「有力候補のひとつ」になっていることを、十月十五日には「最終候補に三島氏も」の見出しで三島と谷崎潤一郎が「最終候補」に残っていることを伝えているが、三島はそうしたメディアの期待感をなぞるように自分をストックホルムに近づけてみせるのである。前出のジョン・ネイスンは『ある評伝 三島由紀夫』のなかでそのことに言及し、

——しかし、その翌日、アカデミーは六十歳のロシア作家ミハイル・シヨロホフが受賞したことを発表した。／だれにもそのことを語らなかつたとはいえ、三島がその結果に失望したことは疑いを容れない。また同様に確実なのは、ふたたび昭和四十二年、自分でもその無意味さがわかつている同じ噂に苦しめられることを許した三島が、もつと手痛い失望を味わったということである。（編集者の友人がくりかえし三島に語ったことだが、ノーベル賞に「候補」というものはないのである。）三島は必死の思いでノーベル賞を望

んでいたのである。三島がはじめて「文化上の攘夷論者」をもって自任した昭和四十一年の末からは、西欧からみとめられようとする三島の渴望は、しだいに一つの矛盾になつていった。だが三島はノーベル賞を飢渴しつつげた。あたかも自己自身に反してであるかのように。

と述べているが、この言説が真相に近いものだとすれば、数年間のタイムラグはあるにせよ、川端から推薦文の執筆を依頼された三島はかなり複雑な心境のなかでそれをしたためたであろうことが想像できる。この推薦文は、単に川端をノーベル賞に推挙するという意味だけでなく、誰よりもそれを欲している自分自身の気持ちを封印し、後衛に退く姿勢を明確にするものでもあったからである。この後、推薦文を同封した書簡には「ノーベル賞の件、小生如きの拙文で却つて御迷惑かと存じますが、お言葉に甘え、僭越ながら一文を草し同封いたしました。少しでもお役に立てれば、この上の倅せはございません。又この他にも何なりとお申付け下さいますやうお願ひ申上げます」（昭36・5・30付）という言葉が添えられていたが、この殷懃さには、むしろ、三島の悔しさと失望が逆説的なかたちで滲んでいるように思う。

自分の〈立場〉というものをつくりだすことに天賦の才を発揮する川端は、それから一年後、三島の屈折した感情を宥めすかすように、こんな文面の書簡を送る。

癡癡老人日記八「遺言状」（他聞をはゞかりますが）のやうな傑作ではないかとおどろきました。中村光夫君とも話した事です。分載終回の分八蛇足ではないでせうか。たゞし谷崎さんハあの老人を死なせるのはいやだつた。死なせるに忍びなかつたのではないかとの中村説でしたがノオベル賞推せん委員もたつきはおもしろいですね。日本側が氣乗りしないらしいフランス作家たちが日本を推すとパリから手紙が来たりしました。まああなたの時代まで延期でせう（昭37・4・17付）

そこには、当時、日本人作家のなかで最もノーベル賞に近いと噂されていた谷崎潤一郎の『癡癡老人日記』（昭37・5、中央公論社）を「遺言状」とよぶ川端がいる。生前の谷崎が川端の文学をまったく評価しようとしなかつたことはよく知られるが、川端もまたそのまなざしに反撥するように、谷崎をアガリに近づいた作家としてとりあげ、さらに、それに続けるかたちで「ノオベル賞推せん委員たちのもたつき」を嘲笑するのである。引用部分の最後には、「あなたの時代まで延期でせう」という意味深長な一節が書き添えられているが、それは労わりや励ましなどではなく、自分が周囲に推されて受賞の榮譽を与えてもらうことを期待せずに期待するたたかさの頭れなのではないだろうか。

4 川端康成のノーベル賞受賞と三島由紀夫の自死

昭和四十三年十月十七日、スウェーデン・アカデミーは、日本人作家としてはじめて川端康成にノーベル文学賞を授与すると報じた「東洋ではインドの詩人タゴールに次いで二人目」。このときアカデミーが受賞理由にあげたのは「すぐれた感受性で日本の心の神髄を表現するその叙述の巧みさ」であり、それを具現する代表作に掲げられたのが『雪国』『千羽鶴』『山の音』だった。また、川端自身も受賞決定直後のインタビューで、サイデンス・テッカーという優れた翻訳者、三島由紀夫という「若きライバル」がいてくれたからこそと謙遜しつつも、自分の文学がもっている「日本文学の伝統の匂い」（『サンケイ新聞』10・18）が認められたことを率直によるこんでいる。ここには、私信のなかでは〈師弟〉の微妙な秩序を維持し続けながら、メディアに対しては「ライバル」という表現を用いて対等な関係をアピールする川端がいる。

ノーベル賞の推薦状をしたためた頃を境に、三島から川端に届けられる書簡は数的にも分量的にも極端に減り、内容も表面的な礼状や挨拶状に終始するようになる。また、図らずもノーベル賞受賞の報せが届く前日に川端が三島に出した書簡には、「拜啓 春の海 奔馬 過日無上の感動にてまことに至福に存じました／新潮社より百五十文字の広告を書けとは無茶な注文 大変な失礼をこの御名作にをかしやうで御許し下さい／この御作はわれらの時代の幸ひ誇りとも存じました／私のおよる

こびだけをとかくお伝へいたしたく存じます」（昭43・10・16付）という、それまでの川端にはみられないほど過剰な称賛が綴られている。そこに見えてくるのは、〈弟子〉の活躍を称賛すればするほど自身の相対的な価値が高まっていくことを知ってしまった川端と、〈師〉と本音で語り合うことを諦めて沈黙へと向かっていく三島の躁／鬱的な関係である。当時、三島から出されたわずかな書簡には、『豊饒の海』四部作の執筆に追われる日々を自嘲する姿とともに、「このごろ拙宅には狂人の来訪ひんびん、つひに早朝窓を破つて闖入してきたのまでございませぬ。神経症患者激増の時代で、文学はキチガヒに追ひ越されさうです。こちらも負けずによほど気が狂はねば、と思ひます」（昭41・8・15付）、「……大人しく仕事だけしてゐればよいのですが、生来のじつとしてゐられぬ性質で、ますく、世間の指弾を浴びてをります。しかし最近F104超音速ジェット戦闘機に乗りましたのは実に痛快な経験でしたので、文芸二月号にそのことを書きました。／日本及び日本人、殊に知識人の動向にはイヤになること多々あり、文壇もあんまり寝呆け方がひどいやうに存じます」（昭42・12・20付）といった剛毅な言葉が踊っているが、その後、三島が辿ることになる運命を知っている読者の側から事後的にこの文面を読むと、そこには躁を装った鬱が痛々しく刻印されている。

自らを「キチガヒ」に擬して、理性に胡坐をかかぬ知識人や文壇を嘲笑した三島は、まるでその宣言を実践するかのようになり、昭和四十三年十月五日に「楯の会」を結成し、民族派学生に軍

事訓練を施すとともに、天皇主義に基づく祖国防衛構想を練りはじめ、「種のかにつながらる活動は、すでに昭和四十一年十二月頃からはじまつており、昭和四十二年四月〜五月には三島自身自衛隊体験入隊を果たしている」。注目したいのは、それが川端のノーベル賞受賞と同年同月の出来事であり、こうした政治活動を行えば将来的にもノーベル賞を受賞する可能性はほぼなくなるといふ事実である。川端のノーベル賞受賞と三島の奇怪とも思える行動との因果関係を書簡の行間から読み取ることができないが、少なくとも、それ以降、三島が自らの作家的榮譽に関して完全に興味をなくしたことは事実であろう。

そんな三島の悲壮さとは裏腹に、時の人となつた川端は様々なメディアに露出し、スウェーデン・アカデミーをはじめとする欧米の理解者たちが用意した「東洋的諦念」や「日本古来の「美」意識」といった修辭句を引き受けるところか、その偶像性を積極的に模倣するような言動を繰り返すようになる。受賞記念講演のために準備した「美しい日本の私」⁽²⁾ というタイトルが物語っているように、川端は自ら進んで欧米からまなざされる「日本」という衣装をまとい、その広告塔として振舞うことで伝統や美意識の継承者という〈立場〉を占めるに至るのである。かつて、「川端康成の小説の冷たい理智とか美しい抒情とかいふ様な事を世人は好んで口にするが、「化かされた阿呆」である」（川端康成、「文芸春秋」昭16・6）と喝破したのは小林秀雄だが、ある意味で、これほど川端の本質を的確に捉えた言葉はないかもしれない。

昭和四十四年八月、三島は滞在先の下田から川端に通の長い書簡をしたためる。それは、かつて文壇にデビューする頃の三島が〈師〉と仰ぐ川端に自らの文学観を懇々と語つた書簡を髣髴させるような真摯さと、自らの決意を奮い立たせようとするかのような悲愴感に彩られている。——書簡の冒頭で川端の「美の存在と発見」、「美しい日本の私」に言及し、「川端さんの随想の御文章は、自ら徒勞や無について語られながら、実に人に徒勞や無をガクンと感じさせてしまふ一種の魔力があります。しかし、この御著の「無」は、はじめから何か明るい生命的な無の本質について、西洋人にわかりやすく語つてをられますから、あの「イタリヤの歌」の読後感に似たものを予感させ、それが直ちに、「美の存在と発見」の最初の頁の、コップの光りかがやく美の発見へと、つづいてゆくやうな気がします。／實際、「美しい日本の私」は、そのまま、日本文学の、今まで誰も一貫して照明を与へなかつた流水を、清い細流水として、明確に、簡潔に、とり出しておみせになつた無類のアンソロジーとして見事なものでした」と褒めちぎつた三島は、やがて、ひとつの具体的な決意を語りはじめる。

——ここ四年ばかり、人から笑はれながら、小生はひたすら一九七〇年に向つて、少しずつ準備を整へてまゐりました。あんまり悲壯に思はれるのはイヤですから、漫画のタネで結構なのですが、小生としては、こんなに真剣に實際運動に、体と頭と金をつぎ込んで来たことははじめてです。

一九七〇年はつまらぬ幻想にすぎぬかもしれません。しかし、百万分の一でも、幻想でないものに賭けてゐるつもりではじめたのです。十一月三日のパレードには、ぜひ御臨席賜はりたいと存じます。(8・4付)

ここで三島が記す「一九七〇年に向つて、少しずつ準備を整へてまゐりました」という言葉が、何らかの政治行動をさしているであろうことは、川端にも容易に察せられたはずである。

また、十一月三日に予定していた「楯の会」パレード「結成一周年記念パレードを国立劇場屋上で挙行」に臨席を所望する記述もみられるが、これもそれ以前の〈師弟〉関係においてはまったく見られなかつた態度である。ある意味で、ここでの三島はにべもなく断られることを承知のうえで川端に縋つていようように見えるのである。

そういう見方で書簡を読むと、その後記される文面には、すべてのプライドをかなぐり棄てた痛々しさが露呈している。

ますますバカなことを言ふとお笑ひでせうが、小生が怖れるのは死ではなくて、死後の家族の名譽です。小生にもしものことがあつたら、早速そのことで世間は牙をむき出し、小生のアラをひろひ出し、不名譽でメチャクチャにしてしまふやうに思はれるのです。生きてゐる自分が笑はれるのは平氣ですが、死後、子供たちが笑はれるのは耐へられません。それを護つて下さるのは川端さんだけだと、今

からひたすら便りにさせていただいてをります。／又一方、すべてが徒勞に終り、あらゆる汗の努力は泡沫に歸し、けだるい倦怠の裡にすべてが納まつてしまふといふことも十分考へられ、常識的な判断では、その可能性のほうがずっと多い(もしかすると90%!)のに、小生はどうしてもその事実を目をむけるのがイヤなのです。ですからワガママから来た現実逃避だと云はれても仕方のない面もあります。が、現実家のメガネをかけた肥つた顔といふのは、私のこの世でいちばんきらひな顔です。

だが、川端はまたしてもその書簡への返信をしないまま遣り過ぐす。三島の懇願は再び黙殺されるのである。

川端は、翌昭和四十五年六月になつてようやく返信の怠りを詫びるが、それはきわめて儀礼的なものでしかなく、それに続く文面では、「老衰もぬかりなくとりついでゐる事です。人ハ皆元氣と言ひますが氣だけはふけてゐる様です。肺浸潤その他あなたの意志行二習ひ何とかきたへて治せないものかと思ひ居ります」といった言い訳が虚しく書かれることになる。

期待が裏切られ、〈師〉が〈弟子〉に向ける慈愛すら感じられなくなつた三島は、結果的に、私たち読者が目にするこのことができる最後の書簡^⑨で、まるで一年前の自分を遠い過去に追いやるやうに、「時間の一滴々々が葡萄酒のやうに尊く感じられ、空間的事物には、ほとんど何の興味もなくなりました。この夏は又、一家揃つて下田へまゐります。美しい夏であればよいが

と思ひます。／何卒、御身御大切に遊ばしますやう」と記す。

この書簡のなかには「一番タフなのは川端さん」といふわれわれの信仰はなかなか崩れませんとという一節も確認でき、川端への怨嗟が皮肉になつて噴出している箇所もあるが、それでも三島は感情的な言葉をすべて抑え込み、自らの諦念を穏やかに語ることで〈弟子〉であることを返上しようとしているのである。その意味で、「何卒、御身御大切に遊ばしますやう」という挨拶は、最後まで作家としての〈立場〉を貫き、〈弟子〉としての三島にのみ関心を払おうとした川端への訣別の言葉だつたに違いない。

【注記】

- 1 この部分の直前には、きわめて唐突に「禁色は驚くべき作品です」という一節がある。ホモセクシャルの世界に取材して書かれた『禁色』（昭26・11、新潮社）は、『仮面の告白』がベストセラーになり世間の注目を浴びていたわりには評価が一定せず、どちらかといえば同時代の読者から拒絶される傾向にあつた作品だが、川端は敢えてその作品を絶賛し、『仮面の告白』に関しては作品の翻訳者にしか興味がないとでもいつた態度で接するのである。また、この書簡を受け取つた三島の方も、日本文学のなかで西洋に訳して面白いと思はれる作品があつたら推薦して欲しいという川端の真意を取り違えて、「拙作の中から、さてどれを、と申してもすぐに出てまゐりません。『遠乗会』など、いかゞでせうか』（昭26・9・10付）などとぬか喜びしている。そこからは、距離を近づけ過ぎた二人が微妙なコミュニケーション不全状態に陥つている様子が伝わつて

くる。

- 2 昭和四十三年十二月十二日に行われたノーベル文学賞授賞記念講演（スウェーデン・アカデミー）の原稿（同月16日、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、中日新聞各紙に発表。後に日本人として二人目のノーベル文学賞（平6）を受けた大江健三郎は「あいまいな日本の私」という記念講演を行い、「美しい日本の私」「独自の神秘主義」に没入した川端を、「…現代に生きる自分の風景を語るために、かれは中世の禪僧の歌を引用しています。しかも、おおむねそれらの歌は、言葉による真理表現の可能性を主張している歌なのです。閉じた言葉、その言葉がこちら側につたわつて来ることを期待することはできず、ただこちらが自己放棄して、閉じた言葉のなかに参入するよりほか、それを理解する、あるいは共感することはできないはずの禪の歌。／どうして川端は、このような歌を、それも日本語のまま、ストックホルムの聴衆の前で朗読することをしたのでしょうか？」と揶揄するが、ここで大江が訝しがる「あいまい」さ、すなわち、自己の主体性を明確にすることもなければ「言葉による真理表現」を標榜することもない川端の戦略は、彼自身が、作家としての技量よりも作家としてどのような〈立場〉を獲得するかが大事だと説いたことと深くつながっている。

- 3 『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』（平9・12、新潮社）の巻末に収録された佐伯彰一と川端香男里との対談「恐るべき計画家・三島由紀夫——魂の対話を読み解く」のなかで、川端康成の娘婿にあたる川端香男里は、三島が川端に宛てた最後の書簡は、同書に収録されている昭和四十五年七月六日付の後にもう一通あつたと証言している。ただし、同氏は「鉛筆書きの非常に乱暴な手紙です。全集の解題でも少し触れておい

たんです。私も内容を忘れましたが、文章の乱れがあり、これをとっておくと本人の名誉にならないからとすぐに焼却してしまっただんです」、「私は今でもとっておかなくてよかつたんだろうと思っております」と語り、自分の責任でそれを隠滅したことを告白している。それが事実かどうかは判断できないが、もし「本人の名誉」を損なう可能性があったのであれば非公開資料として保管すれば済むことであり、同氏の判断で焼却するというのは不遜な行為に思えてならない。

※ 川端と三島は、それぞれの作品の帯文・解説をはじめ、お互いに関する数多くの評論、作品論、随筆を書いているが、それはあくまでも活字と

して公開されることを前提として書かれた文章であり、広汎な意味での読者を意識したバイアスがかかっている。そうした批評的な文章を含めて検討することも重要であるが、本稿では、敢えて私信のみに焦点をあて、活字化された表現からの援用は必要最小限にとどめた。また、それぞれの創作について論旨と関わりのないものについては初出、初刊を割愛している。

※ 本稿は、拙文「もう一人の川端康成」（『毎日新聞』夕刊、平11・5・12）と一部内容が重複していることをお断りしておく。

（立教大学教授）